

自己評価報告書

平成23年4月19日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2012

課題番号：20520155

研究課題名(和文) 初期江戸版の悉皆調査に基づく近世出版史の再検討

研究課題名(英文) A revisional study on the publishing history with reference to the inventory survey conducted in the early Edo period

研究代表者

柏崎 順子 (KASHIWAZAKI JUNKO)

一橋大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号：20262389

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：書誌学・文献学

1. 研究計画の概要

近世文学研究を出版史の解明という観点において考察する研究で、これまでジャンルごとに行われてきた出版史の研究を、一旦その枠を取り払って時期を限定して出版物の全体的な調査を行い、そこから見えてくる事実をジャンルごとの個別の問題に還元しようとする新たな発想の研究である。具体的には万治・寛文期に集中して出版された所謂江戸版とその元版である京版の関係を様々な角度から考察し、その成果を文学研究に資する方法を用いる。方法としては万治・寛文期を中心とした江戸版と京版の悉皆調査を行い、それらの関係性から、出版界の様相やジャンルの問題、著作権の問題等の分析を行う。

2. 研究の進捗状況

本研究の途上、近世初期の出版史を解明する上で重要な鍵を握ると考えられる、万治・寛文期に集中して作成される所謂江戸版を作成する中心的書肆である松会の子孫と連絡をとることができ、松会が伊勢商人であったことが判明した。この事実は出版物を通して文学が発展していく際に、そこに商人の関与を示唆する文学史上重要な問題であり、近世出版史研究の上でも重大な発見である。そこで江戸初期の伊勢版、あるいは伊勢の文芸に関係する版本の調査をし、江戸初期の伊勢と出版の関係を調査するという方向で、当初の研究計画よりもより発展した形で研究が進行している。その結果、万治寛文期以前における伊勢版がこれまで学会に報告されていた以上に存在すること、慶安期を境としてそれ以降は伊勢版が激減し、代わりに京都で伊

勢の文芸、例えば伊勢俳諧等の本が出版されるようになることが判明した。この事実は、古くから暦の印刷のために印刷技術を有していた伊勢が京都の出版、ひいては江戸の出版に関係している可能性を示唆するものである。また、従来の研究とは全く異なる視点、あるいは方法で、近世初期に登場してくる仮名草子や浮世草子といった新たなジャンルの再定義やそれらのジャンルが醸成された社会的な意味が今後の課題となる。本研究は近世初期の出版と伊勢との関係という新たな発見のため、当初の計画とは異なる発展的な研究計画で以上のような成果を上げている状況である。この伊勢と出版の関係をより深く探っていくことで、大阪が三都のなかで一番出版の開始が遅れた理由や、西鶴作品の江戸版が出版される状況への新たな解釈が生まれることも期待され、本研究は想定外の進展をみているといえる。以上のような本研究のコンセプトや方法を、日本古書通信社の依頼によって一般向けにわかりやすく解説した(「江戸版考—著作権の様相」(『日本古書通信』第948号、2008年))。また地方新聞デーリー東北のエッセイ欄「ふみづくえ」(2009年度、年間10回)でこの研究の成果をふまえて一般向けに江戸時代の出版について紹介した。

3. 現在までの達成度

① 当初の計画以上に進展している。

(理由)

本研究が新たな発見(事実)をふまえた展開になったことから、発展的に再構成した研究計画において伊勢、および伊勢版の調査が新たに追加された。その結果、伊勢商人の出版への関与の可能性が高いこと、伊勢の、俳

諧を筆頭とした文芸が江戸初期の文学のジャンルが醸成されていくにあたっての発端となる役割を担っていた可能性が高いこと等が判明した。このような想定していなかった江戸初期出版界の様相が見えてきたことは、出版史を塗りかえる大きな成果であり、当初の目標以上のより充実した研究成果をもたらしている。以上のように、新たな発見による、それに伴う新たな調査が追加された事情から、本研究の当初の研究計画を当該期間内に遂行することはできない。具体的には挿絵の江戸版と上方版の関係を考察する上で重要な師宣絵本の調査等が、まだ充分に行われていないのが現状だが、これらの課題は再構成した研究計画のなかで考究していくことになり、結論としては、当初の予定より発展的に、より充実した達成度にあるといえる。また本研究は文学研究の方法として、従来とは全く異なる発想での研究である。従って、これまでの研究の蓄積による資料は全くなく、所謂江戸版の出版をとりまく状況の把握のために、一から資料の作成、具体的には江戸版が出版される前後の江戸と上方の版本の悉皆調査から始め、それをもとに問題を洗い出し、書誌学的な見地からその問題を考察するという手法をとっている。そのため版本の悉皆調査は、全国および全世界にある諸本を一本一本実際に現地に向いて調査しなければ意味がないという事情があり、膨大な時間がかかる研究である。そのため本研究内での論文の数は必ずしも多いとはいえないが、それぞれの論文は、容易になしえない研究成果として評価されている。とくに本研究の基軸となる江戸版を出す中心的な存在の書肆松会が出版した本の悉皆調査による成果である編著『松会版書目』は、仮名草子の研究者のみならず、菱川師宣を研究している美術の分野の研究者や草双紙の研究者の分野でも、その資料としての有効性を高く評価されている。

4. 今後の研究の推進方策

新たな発見により再構成した研究計画の範囲での江戸版と上方版の関係性、およびそこから見えてくる新たなジャンルが醸成される要因や、著作権意識の問題、江戸版西鶴本が登場してくる要因等を考察し、全体のまとめとなる論文を作成する。その中には当初の計画にはなかった、江戸初期出版界の伊勢との関係という問題も含まれることになる。また本研究は研究途上の新たな発見により、調査の対象が拡大したことから、当初の研究計画通りには推進できない状況がうまれた。具体的には伊勢版や伊勢の文芸と出版の関係は、現段階では基本的な状況がつかめた段階であって、今後も引き続き伊勢現地での調査

も含め関連版本の調査を通しての状況把握が必要である。また江戸と上方の挿し絵の問題を考察するための師宣絵本の調査などは本研究の到達のうへの発展的研究として、新たに取り組むことになる。こうした今後の展望と課題についても整理しまとめをする。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 柏崎順子「鱗形屋」『言語文化』査読無、第47号、2010年、pp61-74
- ② 柏崎順子「江戸版考 其三」『人文自然研究』査読無、第四号、2010年、pp42-73
- ③ 柏崎順子「高橋華陽」『言語文化』査読無、第46巻、2009年、pp41-55
- ④ 柏崎順子「江戸時代に思うこと」『紀要上北』査読無、第43号、2009年、pp17-23
- ⑤ 柏崎順子「一橋大学附属図書館所蔵『奎星帖』紹介」『書物・出版と社会変容』査読無、第4号、2008年、pp1-34
- ⑥ 柏崎順子「江戸版考—版權の様相」『日本古書通信』査読無、第948号、2008年、pp4-6
- ⑦ 柏崎順子「松会三四郎 其の二」『言語文化』査読無、第45号、2008年、pp3-16

[学会発表] (計5件)

- ① 柏崎順子「江戸版の考察を通して見る師宣風挿絵の展開」(於大和文華館(奈良)、2010年12月2日、絵本ワークショップ)
- ② 柏崎順子「初期江戸出版界と伊勢」(於実践女子大学(東京)、2010年5月15日、日本近世文学会春期大会)
- ③ 柏崎順子「情報化社会の江戸に生きた人々」(於青森戸山高校、2008年10月16日、東京青森県人会主催、青森県教育委員会・青森県高等学校長協会共催「高校生のための講演会」) 招待講演
- ④ 柏崎順子「情報化社会の江戸に生きた人々」(於青森東高校、2008年10月17日、東京青森県人会主催、青森県教育委員会・青森県高等学校長協会共催「高校生のための講演会」) 招待講演
- ⑤ 柏崎順子「江戸版考」(於関西大学(大阪)、2008年3月22日、古典籍研究会主催) 招待講演

[図書] (計2件)

- ① 柏崎順子『菅茶山遺稿』(太平書屋、2009年、303頁)
- ② 柏崎順子編『松会版書目』(青裳堂書店、2009年、256頁)